

希望

チューリッヒ日本人学校便り

平成 27 年 4 月 17 日発行

第 3 号

発行人 校長 鈴木史良

ゼクセロイテンに日本の音色

—— 全日・補習校の子どもたちが一緒になった和太鼓ばやし ——

4月12日（日）、よく晴れた日曜日の午後、春の到来を喜び、チューリッヒ市内の目抜き通りを巡るゼクセロイテン・キンダーパレードが今年も盛大に行われました。去年は雨だったとのことでしたが、今年はすばらしい晴天に恵まれました。チューリッヒ市内やスイス各地から、あるいはこの地域に住む各国代表の馬車に続いて、全日制と補習校の子どもたちの参加した馬車、チーム日本も参加しました。

参加にあたり、昨年度から図工の時間に日の丸旗をつくり、和太鼓やお囃子の練習を積み重ねてきました。本番当日、馬車は紅白の幕を周囲に巡らせ、桜の花や提灯、熊手などで日本らしく華やかに飾られ、二頭立ての馬に引かれて進みました。馬車の中央に和太鼓が置かれ、代わる代わる乗り込んだ子どもたちによって勢いよく和太鼓が打ち鳴らされ、威勢のよいお囃子が飛び交いました。私たちの馬車のすぐ前には中国の馬車が行進し、金色に輝く大きなドラゴンが宙を舞っていました。これに負けてはいられないと、子どもたちが更に頑張ったのは言うまでもありません。

沿道の観客にお菓子をふるまうサービスも行いました。みなねじり鉢巻きにお揃いの青いハッピを着てのパフォーマンスは、日本の祭りの雰囲気を見事にスイスの国の人々に伝えることができたと思います。

あまりによい天気だったため、給水も含めて暑さ対策を心配したほどでした。終了後の子どもたちは疲れの中にもやり遂げた喜びが見えました。日本代表として、この国の大きな行事に参加し、精一杯頑張ってくれた児童生徒の皆さんに、感謝の言葉を贈ります。

「ありがとう！ 最後までよく頑張ってくれたね。」保護者の皆さまもお子様の送り迎えをしていただき、ありがとうございました。

※ 翌日、大人のパレードを参観し、午後6時からはベグさんに注目しました。薪に火がつけられ、しばらく煙がもくもくあがっていましたが、そのうちに胴の辺りで閃光とともに破裂音が。すると、あっという間に火炎に包まれました。観衆はやんやの大歓声で、帰ろうにも身動きできないほどでした。



飾り馬車から和太鼓が響く



パレードを盛り上げた子どもたち

学校をつくるということ・・・

以前勤務した日本人学校（ドバイ）で古い沿革史を調べていた時、草創期の学校づくりに関係した人々が綴った言葉を見つけました。

『学校をつくるということは、わたしたちの手で一つ一つの煉瓦を積み、一枚一枚の板に釘を打ちつけることなのです。わたしたちのかわいい子どもたちのために・・・』

私はこの言葉にふれてはっとし、思わず目頭が熱くなりました。日本人学校はそれを心から必要とする人々や親の願いが結晶となってできあがったものであるということを感じました。海外で日本の学校を運営・維持していくことはたいへんな困難が伴い、乗り越えるべき課題も山積しています。チューリッヒ日本人学校の今があるのも、そういう私たちの先人たちの献身的な努力があったからこそに違いありません。以来、私はこの言葉を肝に刻み続けています。

詩を楽しむ

未来

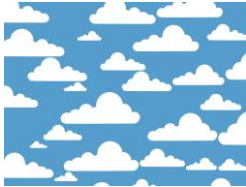
谷川俊太郎

青空にむかって僕は竹竿をたてた
それは 未来のようだった
きまっている長さをこえて
どこまでも どこまでも
青空にとけこむようだった

青空の底には
無限の歴史が昇華している
僕もまた それに加わろうと

青空の底には
とこしえの勝利がある
僕もまた それを目指して

青空にむかって僕は竹竿をたてた
それは 未来のようだった



現代最も活躍している詩人の一人である谷川俊太郎が一九歳の時つくった詩。彼の表現する青空は澄みきった透明感のある青空だ。そういう青空に向かって竹竿を立てること自体が詩的に感じる。

赤ん坊があらゆるものを自分の口の中に入れて、それがどんなものかを認識するように、幼い子どもは自分の感覚器官の及ぶ範囲で外界を捉えていく。だんだん思考力がついてくると、感覚器官だけではなく、知識や概念によって自分を取り巻く世界を推察するようになるのだろう。

この詩の「竹竿」は自分を取り巻く外界に向かって伸びた自意識、自我と読むことができる。この詩が清々しいのは、自意識の方向性が前向きであること、まっすぐに理想に向かって伸びようとしていることだろう。